

新連載

わが家のごみ箱は
SDGsと
つながっている!

SDGsってなに?

織 朱實 Ori Akemi 上智大学大学院地球環境学研究科教授

専門は環境法。廃棄物や化学物質とリスクコミュニケーションなど環境全般を対象とした研究を行っている。最近、SDGsワークショップやカードゲームのファシリテータなども積極的に行っている

はじめに

2020年7月より、レジ袋(プラスチック製買い物袋)の有料化が始まり、改めて身の回りのプラスチックごみに意識を向けるようになった人も多いかと思います。世界に目を向けてみると、世界中さまざまなレベルのステークホルダー(利害関係者)が、「より豊かな世界の実現」に向けて、2030年をゴールとした「持続可能な開発目標(SDGs)」への取り組みを始めています。

しかし、一方では「SDGsってなに?」から始まり、「自分には関係ない遠い目標」という人もまだまだたくさんいます。私たちの身近な問題は、どのようにSDGsとつながっているのか。まずは、新型コロナウイルスによる自粛生活の影響で増加した家庭ごみ、私たちのごみ箱がどのようにSDGsとつながっているのかを考えてみませんか? そこから、本当に必要なものは何

かを考えること、賢い消費者として選択していくこと、分別をきちんと行うことなど日常の一つ一つの行動が、SDGsにつながっていきます。

この連載では、家庭のごみ箱から見えてくるSDGsを、プラスチックごみ、食品ロス、ファストファッションなどをテーマに考えていきたいと思います。

SDGsとはなに?

最近、のようなカラフルなアイコンをよく目にするな、と感じている人は多いと思います。

2015年9月に国際連合(以下、国連)総会で「国連持続可能な開発サミット」が開催され、世界150カ国以上の賛同を得て「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。このアイコンは其中で策定された「持続可能な開発目標」いわゆるSDGs(Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標)の17の目標を表しています。

SDGsは、現在世界が抱えているさまざまな問題を解決し、世界中の人が持続可能な未来を享受できるように世界を変える「17の目標」、「169のターゲット」を掲げています。このサミットには、ローマ法王、オバマ元大統領、習近平国家主席、日本からは安倍晋三

図1 SDGsアイコン(国際連合広報センター)



図2 ミレニアム開発目標(MDGs)



出典：外務省ホームページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/doukou/mdgs.html>

前総理大臣が出席するなど世界中が注目するなかでの採択でした。

(1) SDGsが生まれてくるまでに

SDGsの中心となる考え方「持続可能性」は、1987年ブルントラント委員会が出した報告書「我々の共通の未来(Our Common Future)」の中で初めて示されたものです。「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」という考え方です。1992年には環境と経済の調和、持続可能な開発を大きなテーマとして「国連環境開発会議」(地球サミット)が開催されました。その後、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」、2010年の「ミレニアム開発目標(MDGs)サミット」、2012年の「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」などの国際会議で、SDGsは政府機関だけでなく民間企業やNGOなど広い関係者の間で協議されてきました。SDGsは、成立の過程においても今までの国際アジェンダと異なり、さまざまなステークホルダーの参画のもとで議論されてきたという大きな特色があります。

さらに、SDGsを考える際に忘れてはならないのは、SDGsに先駆け世界共通のゴールを提示したミレニアム開発目標(Millennium Development Goals : MDGs)です。MDGsは、図2のように2015年までに達成したい8つの目標を掲げていました。そのもとで「目標1：極度の貧困と飢餓の撲滅」では、2015年までに1日1.25アメリカドル未満で生活する人口比率を半減する、

2015年には約8億人までに減少、2000年には80%であった就学率が、2015年には91%へと向上するなど、歴史上最も成功した貧困撲滅運動と評価されています。このMDGsを土台に発展してきたのがSDGsです。

(2) MDGsとSDGsの違い

MDGsもSDGsも世界全体で達成すべき共通の目標を設定するという点では同じですが、MDGsは開発途上国の課題が中心であり、先進国はいかに支援するのかという位置づけでした。しかし、先進国の中にも格差問題や都市の安全などさまざまな課題があり、先進国も途上国も一緒に解決しなければならない課題が世界には多数あります。そこで、SDGsでは8つの目標を17に拡大し、さらに1つだけであった環境関連の目標も拡大しました。

また、MDGsは政府主導のプログラムが中心であったのに対して、SDGsの目標は経済・社会・環境の3つの側面すべてに対応し、政府だけではなく、企業やNGO等の民間が主体的に取り組まなければ解決できないものとなっています。そのため、より多様なステークホルダーの取り組みと協力、革新的な技術が必要とされているのです。SDGsでは、課題を解決するための消費者一人一人の行動とともに、企業のイノベーションへの期待も大きなものとなっています。

こうした流れを受けて、一般社団法人日本経済団体連合会は2017年11月に「企業行動憲章」を改定し、民間セクターの創造性とイノベー

ションの発揮によってSDGsの達成をめざそうとの記載を入れました*1。

(3) SDGsの特色

今までみてきたように、SDGsは、MDGsを発展させるものであり、その大きな特徴の1つは、先進国と途上国を二分するアプローチではなく、一緒になり世界の課題を解決しようというものです。「世界はつながっている」「誰一人取り残さない」「私が起点」というフレーズは、SDGsの特色をよく表しています。

この連載でも、「世界はつながっている」なかで、どうやって「誰一人取り残さない」世界を、「私が起点」で実現していくのかをさまざまなテーマで考えていきたいと思います。

持続可能な開発の3つの側面(経済・社会・環境)に関する課題が1つの目標に統合されている点も大きな特徴です。さらに、フォローアップのしくみが作られている点も忘れてはなりません。このフォローアップのための指標があることにより、SDGsはより実効性のある目標となっています。15年間にわたり、実施状況を体系的にフォローアップとレビューをすることが求められており、例えば年1回の国連「ハイレベル政治フォーラム」(HLPF)によるフォローアップのほか、毎年国連事務総長が「年次SDG進捗報告」をすることなどが定められています。SDGsの進捗を測定するための「指標」は、国連統計委員会や関連会合(「SDG指標に関する機関間専門家グループ(IAEG-SDGs)会合」等)での議論を経て策定されています。

SDGsと私たちの生活

このように持続可能な未来に向けての目標であるSDGsは、残念ながら一般の消費者にとっては、あまり身近なものではありません。

でも、私たちのごみ箱はSDGsの世界とつながっているのです。ごみは、私たちが生活して

いれば必ず発生します。例えば、プラスチックごみです。2016年だけで、世界では2億4200万トンのプラスチックごみが排出されています。そして適切に処理されずに海に流れ出たプラスチックごみは、海のごみの90%を占めています。これらは、海洋生物や自然などの地球環境だけでなく、漁業や観光産業などの経済活動にも影響を及ぼしており、さらに有害化学物質が付着することによる人への健康影響も懸念されています。こうしたプラスチック問題の背景には、先進国と途上国の格差や、企業のものづくりや消費者の購買のあり方などの課題があります。また、先進国でコストの面から処理しきれなくなったごみが、開発途上国に運び込まれ、児童労働や地滑りなどの問題を発生させています。

さらに廃棄物からの温室効果ガスも気候変動の主な要因の1つとなっています。2016年には、世界の温室効果ガスの排出量の5%が、廃棄物処理から発生しました。日常生活から出るごみの中からも、SDGsが達成しなければならない課題がみえてくるのです。決して、「遠い世界」の話ではなく、私たち一人一人の生活がSDGsとつながっている、こうしたことを、具体的なテーマから考えていきたいと思います。

今回は、まずごみとは何かをテーマに、「ごみと資源とSDGs」を一緒にみていきましょう。*2



出典：世界銀行ホームページ「What a Waste 2.0」より

* 1 一般社団法人日本経済団体連合会ホームページ <https://www.keidanren.or.jp/policy/cgcb/2017shiryo2.pdf>

* 2 世界銀行 What a Waste 2.0 : 「2050年に向けた世界の廃棄物管理の現状と展望」
<https://www.worldbank.org/ja/news/infographic/2018/09/20/what-a-waste-20-a-global-snapshot-of-solid-waste-management-to-2050>